

分野/Field : Others (Foreign Language Learning Difficulty)

## 非言語的要素を取り入れた英語指導方法

## A Non-Verbal Approach to English Language Teaching

浅野 幸子 (大阪体育大学)

## 1. 目的

近年、大学生の基礎学力の低下あるいは学力差の増大が問題となっているが、外国語(英語)についても、大学生の60%が中学生レベルの学力であるという調査結果(独立行政法人・メディア教育開発センター、2006)が報告されている。特に新カリキュラムによる大学入学者の学力は著しく低下または較差が拡大している。そのために大学においても、英語学習不振や英語学習困難は増加し、指導上の対応が必須となっている。本発表では、次に述べる理論的背景を基に、大学生を対象として、基礎的な英語コミュニケーション能力の養成を目標とした非言語的要素を取り入れた指導について報告する。

## 2. 理論的背景

学習不振あるいは学習困難の原因は、理論的には、学習者の言語・認知機能の特性に適した学習内容が最適な方法で、つまり適性処遇交互作用(ATI:Cronbach, 1957)を考慮した指導がなされていないことである。外国語学習については、学習者側の要因として、言語情報の知覚・認知処理過程、特に音声処理過程の問題が挙げられる。初歩の段階では、音韻知覚(音韻と文字の連合能力)、音韻的作動記憶(音声処理過程で音声情報を短期記憶する能力)、語彙理解(音声と意味を連合する能力)に関すると仮定される。音韻処理能力の重要性は、Dyslexia 領域における The Double-Deficit Hypothesis の理論(Wolf and Bowers, 1999)によっても裏付けられる。この理論では、母国語の読書障害の原因は、話し言葉を聴いて個々の音韻を聞き分ける能力(phonological awareness)と文字を見て自動的に意味概念が分かる能力(Rapid Automatized Naming:RNA)の2つの能力の欠陥であると考えられている。これらの能力は、情報処理過程に関わる視覚認知/即時記憶や視覚・聴覚統合力など作動記憶に関連する。

これまでの大学生対象の調査では、基礎文法力と読解力などを含めた英語総合力が視覚認知/即時記憶と関係し、英語基礎聴解力が聴覚性の論理的遅延記憶と関係あることが明らかになった(浅野, 2006)。聴覚性論理的記憶は、この調査では聴覚刺激の意味理解(イメージ化)と再生の能力であり、視・聴覚統合力である。つまり英語学習困難は、学習者の作動記憶の不十分さに加えて、授業過程での指導の不適合性により生じたと考えられる。従って、言語指導においては、視聴覚統合力、つまり作動記憶を

活性化させることが必要と思われる。また言語の意味の理解という点に関しては、学習障害(Learning Disabilities:LD)、あるいは神経心理学や教育心理学などの研究報告から、非言語的情報の処理能力が大きく関与していることが明らかとなっている。従って、外国語学習困難の傾向を持つ学生の外国語の指導に、このような要素を考慮した方法を取るが望まれる。例えば、Multisensory Structured Language Instruction(Moats and Farrell,2005)、Total Physical Response(Asher,1965)、Silent Way(Gattegno,1963)、Suggestopedia(Lozanov,1966)など挙げられる。

### 3. 授業の概要

大学生1・2年生(体育専門)の必修英語の授業において、英語学力の不足と英語授業に対する不安感を持つ学生を対象に、上述の教授法を応用して、不安感を軽減することも考慮した指導を行った。

授業は、英語の実用性を重視する立場から、コミュニケーションに必要とされる基礎的な「読む」・「聴く」・「話す」・「書く」能力を総合的に伸ばし、中学生の英語学力レベルの到達を目標とした。教材として、English Firsthand Level 1(Helgesen, Brown, Mandeville, & Rost, 2004:Longman)の中から選んだ身近な内容を中心に、映画やCMを併用した視聴覚的な手法によって授業を行った。具体的には、”HSBC”のCMのようにジェスチャー、色などに象徴される文化差を扱っているもの、kinetic/kinestheticな言語内容や教材(Card Games, Pagoda, Abacus, Balls)などである。

学習活動については、(1) ビデオ視聴や実物の提示による言語素材の概要把握、(2) 語句の意味の理解、(3) 文法的な事項の理解、(4) 聴取練習、(5) 音読練習、(6) 読解練習、(7) 簡単な表現練習、(8) ペア・ワークやグループ・ワークによる運用練習を段階的に発展させていった。

### 4. 授業の評価・考察

授業で試みた視聴覚的な手法などによる非言語的要素を重視した指導の学生の情意面(動機・不安感)への影響と英語学習への効果を検証した。英語学習不安感については記述式アンケート調査やForeign language anxiety scale(Howitz,1983)などを参考とし、英語力は、JACET英語基礎コミュニケーション能力テストにより測定・分析した。発表では、指導の実践例を紹介し授業評価について報告する予定である。

### 5. 参考書

- Cronbach, L. (1957). The two disciplines of scientific psychology. *American Psychologist*, 12, 671-684.
- Moats, L. C., & Farrell, M. L. (2005). Multisensory structured language education. In J. R. Birsh(Ed.), *Multisensory teaching of basic language skills* (2<sup>nd</sup> ed., pp.23-41). Baltimore: Paul H. Brooks Publishing Co.
- Wolf, M., & Bower, P. G. (1999). The double -deficit hypothesis for the developmental dyslexias. *Journal of Educational Psychology*, 91, 415-438.